

家内工業における家族労働力の構造と役割 －高齢者の役割に着目して－

湯澤規子（筑波大学 生命環境系）

本報告では結城紬生産地域を事例として、家内工業における家族労働力の構造と役割を高齢者の役割に着目して明らかにすることを目的とする。主たる史料として『結城紬実態調査報告書』（1959年～2008年）を用い、聞き取り調査を通して次の3つの課題を検討した。まず①家族内・地域内分業の中で高齢者層が従事する「糸取り」の実態を明らかにし、次に②1980年代以降急速に進んだ産地全体の高齢化に言及する。最後に③一般的な動向として日本における家内工業の推移をふまえて高齢者の役割とその変化について考察する。

紬の生産反数がピークとなる1980年代における工程別従事者数を見ると、糸取り4,539人（女性約100%, 平均年齢61.3歳）、織り2,526人（99%, 42.7歳）、拵括り675人（0.02%, 48.7歳）、下拵え432人（69%, 63歳）となっており、糸取りと下拵えに高齢女性が従事していることがわかる。とりわけ糸取りには多くの中高齢女性たちが従事し、原料生産に対して大きな役割を果たしていた。その具体像を糸取り人、糸屋からの聞き取り調査により追究すると、糸取りという行為は単なる製糸作業というよりもむしろ、家族や地域の中で自らの存在意義とアイデンティティを実感する意味を有していることが明らかになった。1980年代以降、従事者数は漸次減少し、産地全体の高齢化が進むと（2008年の従事者平均年齢は66歳であり、うち糸取りは73歳である）、紬生産における高齢者の役割そのものはより重要になったが、様々な年齢層が分業する家族内分業は消滅しつつある。

一般的にみると日本における家内工業の歴史は古く、小農経営が確立した近世期から複合経営の一環に位置付けられた諸稼ぎとしての製造業にその起源を見出すことができる。それは老若男女全ての家族労働力の完全燃焼を前提として、農業や日々の暮らしに関わる活動を含めた家族内分業によって支えられていた。このような状況下においては現在所謂「高齢者」と呼ばれる構成員は生産と生活の重要な担い手であった。実はこの構造は家内工業から工場へと移行することによって失われたというよりもむしろ、工場生産のもとに再編成され、高度経済成長期に至るまで長く日本の経済を下支えしてきた。つまり、家内工業における家族労働力、およびその一員として的高齢者は時代の変化を経ながらも一定の役割を果たしてきたといえ、そのような視点からあらためて家内工業の内実を解明する必要性が示唆された。